

# 学期レポート 2010 年秋学期



日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 4 期生 武田 太一



## ボストン大学について

全米で 4 番目を誇るこのボストン大学は、1869 年に創立され、32,000 人の学生がここで学んでいる。全学生のうち、留学生は 5,500 人でありそのうち聾学生は自分 1 人である。このボストン大学ではかの有名なアレキサンダー・グラハム・ベル氏が教鞭を取っていたこともあり、電話の発明及び口話教育の推奨もここから始まっている。その他にキング牧師もこの大学を卒業しており、全米にいる聾者の何十人かもこの大学に在籍していたという。渡米前にはまさかこの大学に入学するとは思っていなかったため、ボストン大学に来てから初めて知ることが多く、恐れ多くもボストン大学の教育学部聾教育修士課程にてこの秋より修学開始となった。この大学では聾関係といえば、学部で聾者学専攻、修士課程で聾教育専攻、博士課程で応用言語学が用意されている。それぞれの専攻に十何人が在籍しており、専攻は違えと同じクラスになることも多く、交流の幅も思いのほかあるといえよう。

自分の留学テーマは聾重複児・者への支援である。聾教育、特別支援教育、カウンセリング、職業訓練、リハビリテーションなどどれを専攻するか院出願の際に迷ったが、最終的にはこのボストン大学の聾教育専攻に落ち着いた。ここで聾教育について掘り下げていくと共に、重複となる障害(自閉症、ADHD、学習障害、知的障害、盲、その他)についてもいくつかのクラスを受講しながら、ボランティアや実習も含め、限られている期間を有効に使いながら、ぜひ日本に持ち帰れるだけの情報や経験を積み重ねていきたい。

## 秋学期のクラス履修について

自分が在籍している聾教育修士課程では必須クラスが 24 クラスあり、2 年間で修了するように考案されている。ASL が全く出来ない人でも、ASL1 クラスから受講することで ASL スキルの向上も組み立てられ、聾学校での実習も用意されている。教授陣は聾、CODA、手話通訳者などさまざまである。

聾教育コースのクラスであれば講師が手話を使うことが大抵であるが、他のクラスでは音声英語である。どのクラスにしても手話通訳者派遣が行われ、聾者聴者共に対等の情報が得られるようになっている。手話通訳者のほとんどはパートタイムではあるが、ノースイースタン大学、ロチェスター工科大学、ギャロデット大学など手話通訳コースを卒業した人であり、通訳技術も高等教育に対応できるほど備わっておりクラスを受講しやすいようになっている。これを日本でも同じように出来なかったのかと悔やまれるが、このような環境を後輩たちのためにも整えていけたらと思う。

この秋学期では以下の 4 つのクラスを受講し、時間割も合わせて記しておく。

- DE573 Expressive/Receptive Vocal Process 聴覚学
- ME503 Elementary Math I 算数教授法 1
- LR551 Reading Development, Assessment, and Instruction in the Elementary School 小学校国語
- LS565 Introduction to Language and Linguistics 言語学入門

月	火	水	木
	<b>ME503</b> 12:30-15:00		<b>ME503</b> 12:30-14:00
	<b>LR551</b> 16:00-19:00	<b>LS565</b> 16:00-19:00	
<b>DE573</b> 19:00-22:00 ※隔週			

## DE573 聴覚学

このクラスでは 2 年おきに開講されているクラスであるため、自分たち 1 年生だけでなく、2 年生の学生も加わって 20 人ほどの学生が受講した。担当教員はボストンこども病院にて言語聴覚士として勤務されている方を中心に、いろんな講師の方に来ていただいて、聴こえの仕組み、補聴器、聴力図の見方、家族・地域・学校支援、人工内耳などあらゆるお話を聞くことが出来た。

聾教育コースは教員を目指す人が集まっているので、言語聴覚士としての知識は必要ないのかもしれないが、児童や保護者からの聴こえの相談などに応じられるように最低限知っておいたほうが良いものを題材として取り上げられており、参考になるものとなっている。マサチューセッツ州では新生児スクリーニングが義務づけられており、例外を除いてほぼ全ての新生児がこの検査を受け、毎年 200 人ほどの聾・難聴児が見つかっている。聾・難聴児が生まれた家庭に対してはあらゆる選択肢が用意されており、聾学校に通う、人工内耳を着用する、メインストリームに通いながら支援を受けるなどがある。家族支援に関しても両親だけでなく、兄弟や親類なども含めて行なっており、教師・言語聴覚士・心理学者などからなるチーム支援もある。補聴器や人工内耳を着用している児童に対しても、教室内の環境をどう整えていくか、FM マイクの使い方は何かなど学校における支援を行う学校言語聴覚士も用意されている。

クラス内では聾・難聴の原因となる病気を調べたり、聾・難聴児を持つ親からの相談を教師としてどう返答するか議論したりと、改めて聾・難聴児を取り巻く環境について考える機会が持てるクラスであった。

## ME503 算数教授法 1

小学校で取り扱う算数の教え方について学ぶクラスである。この学期では「数」「たしざん・ひきざん・かけざん・わりざん」「分数・小数」「比」について学んだ。1つ1つのトピックに丁寧に時間をかけてクラスメイトたちと議論を交わしあいながら、どうしたら児童に理解させることが出来るのか考えてきた。

このマサチューセッツ州では算数教育に力を入れており、教育学部を専攻している全ての学生にこのクラスを受講することが義務づけられている。今まで算数・数学といえば、問題があってその計算方法、答えの出し方を流れ作業のように学んで、「覚えて」きた。しかしその場合、どうしたらこうなるのかという思考力が働かないうえに、日常生活での応用が出来ない。例えば、0 は 1 で割りきれても、1 を 0 で割り切ることは出来ない。なぜか？といった問いに対しても答えられないような現状である。これを打破すべく、あらゆる見方における問題の解き方を教えてもらうことが出来た。今までに学んだことも見たこともない計算方法をいくつか学ぶことが出来、今後も応用できるものばかりであった。自分の生徒には、一方的に教えるのではなくて、どうしたらこうなるのかをうまく引き出せるように技術を磨いていく必要があると感じた。

## R551 小学校国語

Reading Development とあるが、日本の小学校で考えれば国語にあたると思う。読書を通して音韻、語彙、理解力の 3 つの力を児童に身につけさせるにはというのを学んだ。英語の場合は聞いて覚える発音と、実際のスペルが一致していないことが多いため、会話などを通して聞いて覚えることと、実際に文字を見て習得していくことの関連性についてや、英語を第二言語とする児童たちに対してのアプローチなど様々なトピックが飛び交ったクラスであった。

クラスの最後に模擬授業があり、受講生はそれぞれ絵本などを持ち寄って、5 分ほどの模擬授業を行った。自分は聾児を対象に教えることをイメージして、アメリカ手話と英語を両方教えるやり方で進めた。まず絵本にかかっている絵や単語を元に、手話表現をしてもらい、もし分からない表現があったら教えたり、新しい単語はあえて強調して指文字で表すなど工夫をした。実際に児童たちに教えたわけではないので今後は実践経験を積み重ねていかねばと思う。

## S565 言語学入門

以前から言語学を勉強してみたい自分にとっては願ってもないクラスであった。あとで調べてみると、自分が在籍している聾教育専攻ではバイリンガル教育に焦点を当てており、手話を第一言語・書記英語を第二言語といったアプローチで進めている。そのためには言語学・言語獲得について知っておく必要があり、またアメリカでは第二言語習得についても様々な取り組みがなされており、ボストン大学では言語発達学会が毎年開催されているほど、言語関係のクラスが充実している。

言語を詳しく分けようとする、「語彙」「形態論」「音韻論」「統語論」「意味論」「語用論」などに細かく分けられる。最初はこれらの言葉を見ただけでも全く理解出来なかった。しかしクラスを通して、英語だけではなくいろんな国の言葉も例として挙げられており、日本語もその一例として挙げられていた。自分で自分の言語を知るのはあまりないことなので、興味心も手伝ってか課題なども楽しく取り組むことが出来た。

## ボストンでの生活

---

ボストンに移ってきた頃は汗をかくほど暑い日々が続いていたのに対し、学期の終わりになると大雪に見舞われた。辺り一面が真っ白になり、今まで雪国で生活したことがない自分にとっては新鮮な経験でもあり、厄介な経験でもあった。現在住んでいるところは交通や生活環境が整っているところであり、フリーモントで自動車生活していたとは打って変わって、地下鉄移動が中心になった。大学院生活の方も不安と戸惑いが最初は大きかったが、慣れと共に友人にも恵まれるようになり、充実した日々を過している。この冬は久しぶりに日本へ一時帰国する予定であるので、心身ともにリフレッシュして春学期に臨みたい。